



バッハの森通信

第122号
2014年
1月20日発行

一般財団法人バッハの森

〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9 <http://www.bach.or.jp>

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699 e-mail: info@bach.or.jp

郵便振替 00380-4-16119 一般財団法人バッハの森

コミュニティ・バッハの森

成長した文化的共同体

新年おめでとうございます。皆様、良い年をお迎えになり、元気に新しい年を始められたことと存じます。昨年12月にバッハの森は、久しぶりにNHKの取材を受けました。BSプレミアムで、1月31日(金)午後9時より「新日本風土記」で紹介される予定です。

* * *

取材は、クリスマス・コンサートのゲネプロ前日から2つのコンサートを含む計4日間、私だけではなく、演奏したメンバーも聴衆もインタビューする盛りなものでした。私には、バッハの森の目的、研究学園都市の外れに建てた理由、メンバーの皆さんには、何でバッハの森に参加しているのか、と繰り返し質問していました。要するに、バッハの森とは何か、という質問なのですが、いざ答えようとなると、とても一言では答えられない難問であることが、今更ながら分かりました。バッハの森が、既成の組織のジャンルに入らないからです。

教会音楽をテーマにしていますが、教会ではありません。その証拠に礼拝も伝道もしません。他方、学校のようなのですが、学校でもありません。バッハを中心とするバロック時代の教会音楽を歌うために、原語のドイツ語やラテン語を学び、聖書を読みます。しかし学力テストはしませんし、卒業証書の授与もありません。

皆、ただバッハや聖書が面白いから参加しているのですと、ある人に説明したら、クラブ活動みたいなものですね、と言われたことがあります。確かに似ている点もありますが、クラブ活動や同好会ではバッハの森を説明できません。今回、何でここに、(はっきり言えば、何で“こんな所”に)建てたのかと質問され、案外、この質問は、バッハの森の本質に関わっていると思いました。

今でもバッハの森の東正面には田んぼが広がり、

建て混んできた周辺も30年前の創設当時は畑でした。ですから、何でこのような農村地帯に都会的な施設である音楽ホールを建てたのか、という質問は当時からありました。これは一子と私にリトリート・センターという考えがあったためです。「リトリート」とは、軍事用語で「退却」、宗教用語で(修行のための)「隠遁」を意味します。実際、バッハの森の建物に入ると別世界にきた雰囲気を感じる、という感想を聞くことがあります。勿論「修道院」を考えたわけではありません。一般市民が普通の日常生活を送りながら、週に1回か2回、精神的・文化的“リトリート”をする場所が必要だと思ったのです。

* * *

確かに、バッハや聖書は、日本で一般的なテーマではありません。しかし、これは一子と私が継承して育った文化に根ざしたテーマなので、変えようがなかったのです。その代わりに、最初から誰にも押しつける気はありませんでした。それに、入会、退会はもちろん、合唱や研究会などに参加することも、すべては各自の自由意志によるという方針を貫いてきました。今でも時間割と会費の金額以外は、最小限のルールしか定めていません。

当然、バッハの森の外でメンバーには各自の生活があり、普通お互いに無関係です。実際、これほどゆるやかな組織が、よく30年近くも続いたと思うことがあります。しかし、メンバーにとって、バッハの森が、なくてはならない存在であることも事実なのです。そこで、一旦関わった時には強固な連帯が生じ、皆でバッハの森を支えてきました。“ゲマインシャフト”とか“コミュニティ”(精神的・文化的共同体)と呼ぶ現象ではないでしょうか。

ここ数年間、バッハの森はベビーラッシュです。クリスマス・コンサートのリハーサルには、いつも幼児が数人“参加”していましたし、コンサートでは画期的なことが起こりました。7歳のマナちゃんがクワイアに参加して、お父さん、お母さんと並んで、バッハのカンタータをドイツ語でちゃんと歌ったのです。バッハの森が“コミュニティ”として成長してきた証拠ではないでしょうか。(石田友雄)

クリスマスの意味 人類が生き残る唯一の道の始まり

*このメディタツィオは、2013年12月15日に開かれた「クリスマス・コンサート」で朗読された原稿の改稿です。

イエス・キリストが誕生したときに起こった出来事として、マタイによる福音書は、エルサレムに東の国から来たマギとヘロデ王のこと、ルカによる福音書は、羊飼いたちが、ベツレヘムの馬小屋で幼な児イエスを見つけ出したことを語ります。この二つの物語は、全く別の出来事を伝えています。聖霊によってみごもった処女マリアがイエス・キリストを生んだ、という話で一致しています。その意味するところを理解するために、イエス・キリストの出自に関するヨハネによる福音書の説明を参照しましょう。

ヨハネの説明

ヨハネによる福音書は、マタイやルカのように、「物語」ではなく、「神学的」「哲学的」、乃至は「神秘的」な言葉によってイエス・キリストの出自を説明します。それによると、天地万物が創造される前に「言葉」（原語のギリシャ語で「ロゴス」）が存在したが、それは神と共に存在し、しかも神であったと、いきなり大変分かりにくい説明をします。この説明の説明は後回しにして、この「ロゴス」が万物を造りだすと、その中に「命」があり、「命」は人間を照らす「光」であったが、「暗闇」は「光」を理解しなかったと続けます。その後で、「暗闇」「世」「自分の民」は「ロゴス」を認めず、受け入れなかったと語ります。ここまでくると、天地万物の創造以前に神と共に存在し、神自身でもあった「ロゴス」はイエス・キリストを指し、「暗闇」「世」「自分の民」は、キリストの誕生に敵意を抱いたヘロデ王、或いは、イエスを十字架につけて殺したローマ人とユダヤ人の指導者たちを意味していることが分かります。

そして、マタイとルカが語る、「処女マリアは聖霊によってイエス・キリストをみごもった」という報告について、ヨハネは「ロゴスは肉となって私たちの間に宿られた」と説明します。「肉」とは「人間」を意味します。注目すべきは、この続きです。「私たちは、その（すなわち、肉となったロゴスの）栄光を見た。それは父なる神が、（天地万物のように創造したのではなく）唯独り産んだ息子としての栄光であって、恵みと真理に満ちていた」と説明を続け、最後に「私たちは皆、この方の満ち溢れる豊かさの

中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。・・・恵みと真理はイエス・キリストを通して現れた。いまだかつて、神を見た者はいない。父なる神のふところにいます唯独り産まれた息子である神、この方が神を示されたのである」と締めくくります。

「天の王国」を地上に

これらの、マタイとルカの物語、それにヨハネの説明から、当時、実際に起こった出来事を推測してみましょう。当時、ユダヤとガリラヤのユダヤ人民衆は、ローマ帝国の収奪支配に苦しみ、それに対抗して過激派ユダヤ人が起こす争乱に怯えていました。同時に、彼らは、ユダヤ人コミュニティの指導者であったエルサレム神殿の祭司たちと、民衆の生活規範を定める律法学者たちの偽善的な支配に疲弊していました。そのため、ダビデ王の子孫からメシアが現れ、彼らを救い出してくれる日の到来を、今か今かと待望していたのです。

このような状況下、ナザレという田舎町出身のイエスが、「神の王国」乃至は「天の王国」が地上に実現することを目指して活動を始めました。彼は分かり易い言葉で民衆に語りかけ、今どんなに苦しくても、最後には必ず救ってくださる神の愛と正義を信頼するよう教え、励ましました。他方、支配者たちの偽善を憎み、いかに表面的に取り繕っていても、彼らは絶対に天の王国に入ることはできない、と痛烈に批判しました。しかも、彼は教えを説いただけではありません。苦しんでいる人、特に重い病いに苦しむ人が助けを求めると、いつも奇跡的な力で癒してやりました。それは、「天の王国」が地上に実現し始めたことのあるしと考えられました。こうして有名になったイエスの下に、大勢の弟子や民衆が集まり、当然、この人こそ長らく待望してきたメシアではないかと考え始めたのです。

破綻する「地上の原理」

イエスと弟子たちが、田舎のガリラヤ地方で活動している間はそれですみましたが、春の大祭を祝うためエルサレムに上京して来ると、イエスを危険人物とみなしていた支配階級は、直ちに彼を騒乱罪で逮捕し、十字架にかけて処刑してしまいました。こうして、「天の王国」を地上に実現しようとしたイエスの運動は、3年も続かない短いエピソードで呆気なく終わりました。ひどく落胆した弟子たちは、一旦、ちりぢりに逃げだしましたが、ここで驚くべき逆転現象が起こりました。イエスが処刑されたことにより、彼が説いた「天の王国」が何であるか、初めて彼らに理解されたのです。

イエスに従っていた弟子たちも民衆も、イエスが、天からの不思議な力、結局は暴力によって、ローマ人とユダヤ人の支配階級を追い払い、「正義」を樹立しようとしていると考えていました。しかし、そのようにして樹立された「正義」は、いつの日か、また他の「正義」によって滅ぼされることを、イエスは知っていました。ゲッセマネの園で彼が逮捕されたとき、剣を抜いて抵抗した弟子にイエスは言いました。「剣をさやに収めよ。剣を取る者は皆、剣で滅びる」。

経済力であれ、軍事力であれ、結局は力の強い者が勝つ、という「地上の原理」に対して、もっと強い者が出てくれば滅びるだけだ、と論じたのです。そして、「天の原理」によって初めて人間は生きることができると説き、しかも、自分の命を捨てることによってそれを実証してみせたのです。

他の命を生かす生き方

「原理」という言葉は、ギリシャ語に訳せば「ロゴス」です。ヨハネはイエス・キリストを「ロゴス」と呼ぶことにより、彼が「天の原理」を人間に伝えた人であったことを伝えたのです。マタイとルカが、聖霊によって身ごもった処女マリアがイエスを生んだと語るのも、彼が「天」を地上に持ち込んだと言いたかったのです。

では「天の原理」に生きるとはどういうことでしょうか。誰もが、イエスのようなことを言っていたら、生きてはいかれないと考えています。イエスをメシア、すなわちキリストと信じると称する人々、すなわちキリスト教徒も例外ではありませんでした。あれ以来 2000 年間、誰もが自分の力に頼って生きてきた結果、人類は「平和」を得ることが出来ませんでした。

ここで、再び「恵みと真理はイエス・キリストを通して現れた」と言うヨハネの言葉に注目しましょう。「真理」とは、私たち人間が、他の命の犠牲によらなければ、自分の命を保ち、生きてゆくことができない存在だ、という事実です。「恵み」とは、そのような命を与えられて、現に今、自分が生きている、いや「生かされている」ことです。これらの事実に基づいて考えるなら、「天の原理」とは、他の命を奪って生きるのではなく、自分の命によって他の命を生かす生き方と言えるでしょう。

実は、そのような生き方を、人間を含むすべての生物は、自然に行っています。例えば、親が子を生み育てるといふ自然界の営みは、自分の命を犠牲にして新しい命を生かすことに他なりません。しかし、多分、人間だけは、果てしなく自分の欲望を追求する結果、他の命を平気で奪い取ります。弱肉強食と

いう言葉が、しばしば自然界の食物連鎖を意味し、実際、一定の地域で天敵に抵抗できなかった種が絶滅したケースがありますが、それは大抵人間が天敵を持ち込んだ結果であり、自然界では、本来、すべての種は共存しているものなのです。弱肉強食という「地上の原理」を実行してきたのは人間だけです。

その結果、20 世紀前半に世界戦争は終わりましたが、その後、今日に至るまで、世界各地で戦乱が絶え間なく続き、殺し合いを止めません。世界の半数が飢えているのに、各国は莫大な予算をつぎ込んで軍備を増強し、経済発展を第一目標に、止めどもなく資源とエネルギーを消費してきました。その結果起こった、自然環境の破壊が、大気と土壌を汚染し、異常気象を引き起こしています。すでに多くの人々が、このまま行くと、この先何年、地球上で人類が生存できるかわからないことに気づいています。それにもかかわらず、私たちは、誰も「地上の原理」を変えることができないのです。

クリスマスは「天のロゴス」の始まり

2000 年前に、ナザレのイエスの生き方と死に方にインスピレーションを受けて、「地上の原理」を「天の原理」に代えなければ「平和」を得ること、すなわち、生き残ることはできない、と気付いた人々がいました。そして、イエスが説いた「天の王国」の原理、すなわち「天のロゴス」によって天地万物は創造されたと悟ったのです。この悟りは、「創造された」ではなく「創造されなければならない」でしょう。それ以外に人間が生き続けることはできないという悟りなのですから。そこで彼らは、「天のロゴス」を敢えて「神」と呼びました。日本の八百万の神々ではありません。イスラエル・ユダヤの文化、ヘブライズムによる唯一絶対の神です。それ以外に人間が生き残れる道はない、という悟りなのですから。そして、その出発点は、この「天のロゴス」が人間として「私たちの間に宿られた」ときだと説明しました。クリスマスです。

“Gloria in excelsis Deo”「栄光はいと高きところにいます神にあれ」とは、天の王の支配を認め、「地上の原理」を捨て、「天の原理」に従って生きるという決心の告白です。この告白をする人々が神の「みこころに適う人々」、「hominibus bonae voluntatis」です。こうして初めて「地上に平和」“et in terra pax”が来ます。

ご一緒に“Gloria”を唱えてみませんか。ナザレのイエスが命をかけて伝えようとした「天の原理」によって、真の平和を獲得する道が見えてくるかもしれません。(石田友雄)

10. 17, 24, 31 運営委員会 参加者各 4 名。
 10. 28 来訪 左近和子氏 (オルガニスト)、内藤節子氏 (会員)。
 11. 2 来訪 東福光晴氏 (バッハアンサンブル富山、コンサートマスター)、尾島理英子氏 (同アンサンブル伴奏者)。
 11. 7, 14, 21, 28 運営委員会 参加者各 4 名。
 11. 23 特別練習 クリスマスの音楽会。参加者 12 名。
 11. 29 出席 実務セミナー「一般財団法人移行後の運営実務と留意点」1 名。
 12. 5, 12, 19 運営委員会 参加者各 4 名。
 12. 12 クリスマス飾り付け 参加者 6 名。
 12. 13 取材 花谷毅氏 (NHK 水戸、ディレクター)。
 12. 14 ゲネプロ 参加者 19 名。
 12. 14, 15, 21 取材 花谷毅氏 (NHK 水戸)、塚原和則氏 (カメラ)、相野台弘氏 (音声)。
 12. 15 クリスマス・コンサート 参加者 50 名。
 12. 21 家族で楽しむクリスマスの音楽会 参加者 43 名 (大人 32 名、子ども 3 名、幼児 8 名)。
 会員のためのクリスマス祝会 参加者 25 名 (大人 18 名、子ども 2 名、幼児 5 名)。
 12. 22 ~ 2014.1.8 冬期休館
 12. 28 年末大掃除 参加者 6 名。

J. S. バッハの音楽鑑賞シリーズ コラール・カンタータ研究 コラールとカンタータ (JSB)

10. 19 第 360 回、三位一体後第 13 主日のためのカンタータ「お前はお前の主なる神を愛さなければならない」(BWV 77) ; コラール「これぞ聖き十の主の戒めなり」、「たとえ覚りあり」。オルガン: J. S. バッハ「これは聖なる十戒である」(BWV 679)、海東俊恵。参加者 12 名。
 10. 26 三位一体後第 16 主日のためのカンタータ「キリスト、彼は私の命」(BWV 95) ; コラール「わが終わり迫り、いまわのときに」。オルガン: J. S. バッハ「あなたが死からよみがえられたのですから」(BWV 95 / 7)、安西文子。参加者 9 名。
 11. 2 第 361 回、オルガン: J. G. ヴァルター「キリスト、彼は私の命」(BWV 45 / 7)、安西文子、當眞容子。参加者 17 名。
 11. 9 三位一体後第 20 主日のためのカンタータ「ああ、私は見る、今、私が婚礼に行くときに」(BWV 162) ; コラール「すべての人みな死すべきさだめ」。オルガン: J. S. バッハ「ああ、私はすでに見た」(BWV 162 / 6)、當眞容子。参加者 12 名。
 11. 16 第 362 回、オルガン: J. G. ヴァルター「すべての人は死ななければならない」、當眞容子。参加者 11 名。
 11. 30 第 363 回、三位一体後第 25 主日のためのカンタータ「恐ろしい終わりがお前たちを引き裂くだろう」(BWV 90) ; コラール「取り除きたまえ、誠のみ神よ」。オルガン: D. ブクステフーデ「われらより取り除きたまえ、主よ、真実なる神よ」(BuxWV 207)、笠間きよ子。参加者 15 名。
 12. 7 第 364 回、アドヴェント第 4 主日のためのカンタータ「お前たち、道を備え、大路を整えよ」(BWV 132) ; コラール「主なるキリスト、神の独り子」。

オルガン: J. S. バッハ「主なるキリスト、神のみ子は」(BWV 601)、金谷尚美。参加者 12 名。

学習コース

- バッハの森・クワイア (混声合唱) 10.19 / 15 名、10.26 / 12 名、11.2 / 19 名、11.9 / 16 名、11.16 / 13 名、11.30 / 15 名、12.7 / 19 名。
 バッハの森・バロック・アンサンブル 10.19 / 4 名、11.2 / 4 名、11.16 / 3 名、11.30 / 4 名。
 バッハの森・ハンドベル・クワイア 10.19 / 4 名、10.26 / 4 名、11.2 / 4 名、11.9 / 5 名、11.16 / 5 名、11.30 / 5 名、12.7 / 5 名。
 オルガン音楽研究会 10.25 / 8 名、11.8 / 9 名、11.29 / 6 名、12.6 / 7 名。
 コラール研究会 10.25 / 8 名、11.8 / 8 名、11.22 / 6 名、12.6 / 7 名。
 クラヴィコード・オルガン教室 10.25 / 4 名、11.8 / 4 名、11.29 / 3 名、12.6 / 3 名。
 オルガン・クラブ 11.1 / 3 名、11.22 / 3 名。
 読書会: 聖書 10.19 / 4 名、10.26 / 4 名、11.2 / 6 名、11.9 / 4 名、11.16 / 4 名、11.30 / 3 名、12.7 / 7 名。
 オルガン、クラヴィコード、チェンバロ練習 10.15 / 2 名、10.16 / 1 名、10.17 / 1 名、10.18 / 2 名、10.19 / 1 名、10.22 / 4 名、10.23 / 1 名、10.24 / 3 名、10.25 / 1 名、10.26 / 1 名、10.29 / 4 名、10.30 / 1 名、10.31 / 2 名、11.1 / 2 名、11.2 / 1 名、11.5 / 3 名、11.6 / 2 名、11.7 / 2 名、11.8 / 2 名、11.9 / 2 名、11.12 / 2 名、11.13 / 1 名、11.14 / 2 名、11.15 / 1 名、11.16 / 1 名、11.19 / 2 名、11.20 / 2 名、11.21 / 1 名、11.22 / 2 名、11.26 / 2 名、11.27 / 1 名、11.28 / 3 名、11.29 / 1 名、11.30 / 2 名、12.3 / 1 名、12.4 / 1 名、12.5 / 1 名、12.7 / 1 名、12.10 / 1 名、12.11 / 2 名、12.12 / 2 名、12.14 / 1 名、12.17 / 1 名、12.18 / 1 名、12.20 / 2 名、12.21 / 1 名。

* * *

寄付者芳名 (敬称略日付順)(2013.10.5 ~ 12.15)
 下記の方から計 20,000 円のご寄付をいただきました。
 小関亘子。

建物維持積立寄付 (敬称略日付順)(2013.10.5 ~ 12.15)
 下記の方々から計 122,000 円のご寄付をいただきました。
 岡本由紀子、竹植理子、石井和子、海東俊恵、岩瀬倫子、酒巻真粧子、大和田みどり、比留間恵。

オルガン修復募金 (敬称略日付順)(2013.10.6 ~ 12.15)
 下記の方々から計 1,059,500 円のご寄付をいただきました。
 竹内博子、内藤節子、岡本由紀子、岡田鈴代、長岡佐栄子、海東俊恵、石田友雄。

* 本年 4 月以降、来年 3 月までに 200 万円を目標にオルガン修復募金を始めたところ、12 月 31 日現在、計 2,260,454 円となり、目標が達成できたことを深く感謝いたします。ただし円安が急速に進んでいるため、これで提出されている見積もり額 20,000 米ドルがまかなえるかどうか分からない状況です。『通信』4 月号で収支報告ができると思います。